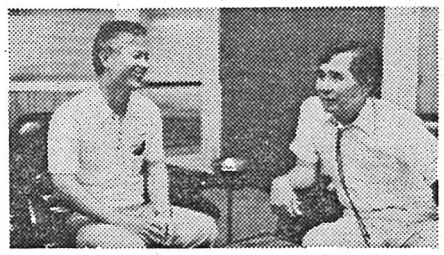
美術アート

六月から「美術」特集を再スタートした。与儀達治（県美術家連盟会長、沖展会員）、稲嶺成祚（琉大美工科教授、沖展会員）の両氏に、対談形式による「美術月評」を担当してもらった。第一回は四月「沖展」以後の個展を中心に取り上げた。この特集は、毎月初旬に掲載します。



稲嶺成祚氏（左）と与儀達治氏

最大の収穫は永津

神山、密度の高い仕事を

□　□

沖縄の側面描く意味で存在は大

◆与那覇朝大作品展＝4月9～30日、画廊匠＝

与儀　緻（ち）密な技法で優れた人だが、批評にあまりあがってこなかった。彼の絵は、われわれの世代が描いてくる過程で抜けてきた部分をきちんと押さえている。

稲嶺　写実的な描写力ということか。僕たちのころは、描写力にそんなに信頼を置かないところがあった。

与儀　そう、すでにモダンアートが吹き荒れていた。

稲嶺　われわれは印象派から出発している。白と黒による明暗ではなく、色の鮮やかさで明るさを表現した。彼は基本的に明暗で描く。また、彼の絵は水彩でも重厚感があり、暗さがある。彼自身暗い面を持っているというよりも、悪くいえばうじうじした沖縄人の後ろめたさといったもの。心情的に暗いものへの郷愁を持つ。

与儀　その暗さに一種の作為を僕は感じる。それは米人相手に肖像を描き、あのかげりの部分を最近の絵に取り込んでいるためではないか。かげりを描くことで何かを主張している。沖縄の側面を描く意味で、朝大の存在は大きい。

稲嶺　そう、与那覇朝大というステップが沖縄画壇のなかで必要と思う。だれかが描かねばならない。

□　□

エッジの鋭さなく絵にきしみがない

◆自選・神山泰治展（4月12～17日、県民アートギャラリー

稲嶺　回顧展的で、大まかに六〇年代「闘鶏」、七〇年代「海の詩」、現在の「心景」と三シリーズにわかれていた。仕事としては「闘鶏」が好きだ。その重い感じに対し、「海の詩」は軽い。この軽さをもっと生かすか、別に求めるか、いずれにしろ密度の高い仕事をしてほしかった。「海の詩」でなされぬままに「心景」に移った。「海の詩」の軽さがマイナスに感じる。

与儀　「海の詩」から抑制がきかずにスッと流れた感じね。もっと突っ込んでやっておけば、はずみのつき方も変わったろう。「心景」は版をそのまま素材に使っているが、エッジの鋭さがない。色がすべって、フォルムのエッジがきちんとあらわれてはこず、絵にきしみがない。赤系統はまだいいが、ブルーは胸に響いてこない。彼自身、まだ納得していないし、試みの展覧会ではなかったか。

□　□

様式も色々と試み新作品に見ごたえ

◆永津禎三絵画（76～83）展＝4月19～24日、県民アートギャラリー

与儀　ことしの収穫と思う。新しい作品に見ごたえがあったが、それ以前の試作に自分自身を痛めつけてきたところがあった。それをステップにしてきた。アクリル、クレヨン、ガッシュなど素材もさまざまに試みている。様式の研究も勇気を持ってやっている。われわれには曼陀羅やキリスト教的な後ろ向きの様式は、怖くてなかなかできないよ。

稲嶺　素材の研究と様式の多様な変化の両面においてエネルギッシュだ。最近のテンペラへの移行は、フンデルト・ワッサーの影響が大きい。実験意欲のおう盛さ、あの徹底さは沖縄の人にはない。不気味な絵をかくヤンセン（ドイツ）の影響でシュール風な作品がある。作品「イノセント」で具象から抽象にかわっていくが、中にヤンセンの影響が残っている。ことしの作品にはないがね。今後、危ぐするのは、抽象絵画は、あるあくどさ、心理的なドロドロしたものを失っていく。永津が完全に抽象に移行したとき、その味がなくならないか。

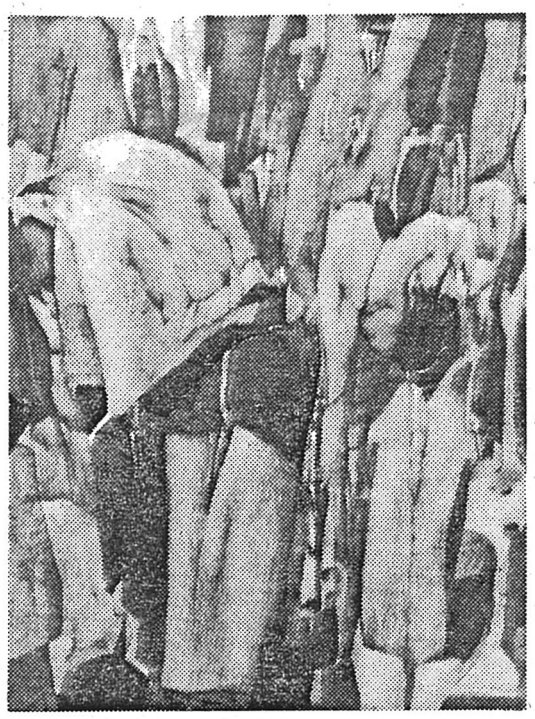
与儀　抽象はむしろ晴れあがっていくわけだ。永津は抽象を試みながらも、心情的な面を残しているが、それを捨てていくのかどうか、今後の展開が楽しみだ。

□　□

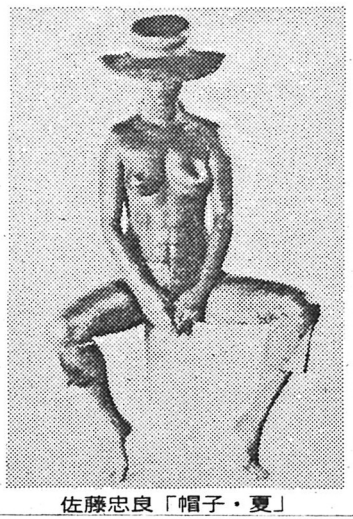
全体的に神経の行き届いた作風

◆永原達郎水彩画展＝5月7～30日、画廊匠＝

稲嶺　熱帯の魚の紋には、クレヨンで模様をかいて、上から水彩を流す。クレヨンの水をはじく性質をうまく使っていた。全体に神経のいきとどいた描き方だ。与那覇と今回の絵は技術的には似ているが、永原は〝明るさ〟を求めている点で異なっている。



永津禎三「Genetics 82—10」



佐藤忠良「帽子・夏」

与那覇朝大「すゝきの平安座島」